

## <事例報告>

[授業研究班]

# 授業外教育プログラムの展開と意義

—— 体育教育におけるラーニング・ブリッジングの事例 ——

北 徹 朗  
森 正 明

## 1. はじめに

我が国における高等教育政策は、1991年7月に施行された大学設置基準の大綱化以降、カリキュラム改革や単位制度の実質化といった制度面の整備が行われている。例えば、ラーニング・アウトカムズとしての学士力や社会人基礎力の提示、学生の能動的な学びを引き出そうとするGP政策といった実践面での整備が進められてきた<sup>1)</sup>。

学士課程におけるラーニング・アウトカムズに関する研究はアメリカが先進的である。1970年代、アメリカでは大学が大衆化し学生の学習の質の低下が問題となっていた。また、政府に対する説明責任（アカウンタビリティ）の要求が高まり、教育への投資の効果を明らかにすることが求められるようになったことなどから、教育効果を高める因子を探る研究が進化した。これらの研究によって、教員がいくら熱心に授業をしたり学習環境を整えたりしても、学生自身が積極的に学びに関わらなければ効果が上がらないことが示されていった<sup>2)</sup>。インディアナ大学中等後教育研究所が2000年に開発したNSSE (The National Survey of Student Engagement) や、UCLAが開発したCIRP (Cooperative Institutional Research Program)などは、効果的な教育実践や学生の学習行動を測る学生調査としてよく知られている。河合<sup>1)</sup>はNSSE調査研究は2つの目的を据えていると分析している。1つ目は、大学生を調査しそれに基づいた教育の改善に結びつけること、2つ目にその成果を社会に示すことでアカウンタビリティを果たすことであるとしている。

また、Kuhは、AAC&U (Association of American Colleges and Universities) のLEAP (Liberal Education and America's Promise) プロジェクトの一環として、効果的な教育実践について報告書をまとめている。単位を付与する正課カリキュラムだけでなく、カリキュラム補助型 (co-curricular) 教育実践を含む、大学生活全体に関わる大学教育実践の効果的な形態が示されている<sup>1,3)</sup>。河合<sup>1)</sup>は、これらの先行研究を踏まえ、大学生の教育実践について、正課外での学習と正課授業での学習とその関係という学習ダイナミクスを対象として検討し、授業と授業外の間を移行・往還しながらそれぞれの学習を結びつけて統合することを「ラーニング・ブリッジング」として概念化した。要するに、正課外授業の実践コミュニティに足場を置いて正課授業での学習へとブリッジングしている学生が知識・技能の習得に関する得点が高いことを明らかにしている。

本研究では、大学の教養体育授業 (ゴルフ) において、ラーニング・ブリッジングを試行的に実践し、正課教育と正課外教育を一体化させた体育教育実践の事例をふりかえり、授業外教育カリキュラムの展開と意義について検討することを目的とした。

## 2. 大学教養体育において特徴的な教材である「ゴルフ授業」の現状と課題

前述のように、大学設置基準の大綱化以降、カリキュラム改革などの制度面の整備と、ラーニング・アウトカムズとしての学士力や社会人基礎力の提示、GP政策に代表される主体的・能動的な学習を引き出そうとする実践面での政策が進められてきた。大綱化以降のカリキュラム改訂では従来必修科目であった「保健体育」の廃止や選択科目化が相次いだ。大学教養体育が必修科目であるべきという法的根拠がなくなってから26年以上が経過しているが、実際には、教育職員免許法施行規則第66条の6で「体育」(2単位)を修得することが定められていることなどから、大半の大学では教職課程を設置しているため、教養体育授業が多く開設されている<sup>4)</sup>。

大学における教養科目としての体育教育のディシプリンを概観すると、体力の向上、運動・スポーツ技術の向上、健康教育 (心身の健康の維持・増進) は、学校体育 (小～高) の中核を占める目的と内容と同様に構成されている<sup>5)</sup>。大学は保健体育を学ぶ最後の機会と考えられるため、社会に出てからも運動・スポーツを継続・実践できる態度を養い (生涯スポーツ)、生活習慣病の予防やメンタルヘルスの維持・増進への寄与と言う点においても重要な役割を果たしている。

大学の教養科目における体育実技授業においては、学校体育 (文部科学省の学習指導要領で定められる、小・中・高等学校での体育) で教材とされてきた内容も多く扱われているが、大

学での特徴的な教材として「ゴルフ」が挙げられる。ゴルフは、高等学校の学習指導要領に「ターゲット型」として記載はされているものの、その対象は体育の専門課程を有する高校に対する教育内容となっている<sup>6)</sup>。そのため、大学教養体育においてゴルフ授業を受講する学生の大半は、大学の授業で初めてゴルフクラブを握る。例えば、著者の授業では、毎回第1回目のオリエンテーション時にゴルフクラブを握った経験の有無を書かせるが、概ね9割以上の学生は大学の体育授業までクラブを一度も握ったことが無い。

著者らの調査報告では、全国の4年制大学でゴルフが教材とされている大学教養体育の数は、約580授業も存在する<sup>7)</sup>。同じく著者の先行研究では、ソフトボールが教材とされているのが約280授業であることから<sup>8)</sup>、ゴルフがいかに多くの大学体育で実施されているかがわかる。しかしながら、これらのうち、実際にゴルフ場で行われるゴルフ授業は約50授業程度に過ぎず、それ以外の約530授業は学内の教場（グラウンド、体育館、テニスコートなど）で、プラスチックボールや、穴あきの軽量ボールを打つなどするスイング学習を中心としたカリキュラムのみで完結している<sup>7)</sup>。つまり、実際のゴルフとはかけ離れた省スペースで、簡易的な用具を用いた内容で行われている授業が大半であることが明らかとなった。このような対応は、大学の体育実技授業でよく実施されている他の球技（例えば、サッカー、バドミントン、テニス、バスケットボール、ソフトボール、バレーボール、卓球など）では考え難い。

つまり、大学教養体育で取り扱われるスポーツ種目は、ルールで規定されたフィールドでゲームを経験しその種目の特性や楽しさを体得させることができるが、ゴルフの場合、教具・教場環境の面から、それが達成し難い状況が全国的にも見られている。

著者らが過去に実施した、「担当教員と授業スケジュールは同じだが教具や教場環境が異なる複数の大学におけるゴルフ授業への介入調査」では、教具や教場の影響は、学習効果や継続意欲（生涯スポーツ）へも大きな影響を及ぼすことが示唆されており<sup>9)</sup>、学内教場のみで完結するゴルフ授業は「生涯スポーツ」を学習目標のキーワードの1つとする大学教養体育において、その目標が果たされ難い状況にあることは否めないことが推察された。

### 3. 大学ゴルフ授業研究会と「Gちゃれ」の展開例

北ら<sup>7,9)</sup>の研究成果がきっかけとなり、2012年11月に「大学ゴルフ授業研究会」が組織された。この研究会では、年に1回の研究集会のほか、オンラインジャーナル「ゴルフ教育研究」の発行（年1回以上）、大学ゴルフシンポジウムなど、他のスポーツ種目よりも授業展開に工夫が必要なゴルフ授業に特化して効果的な授業実践等について検討が重ねられている。

表1 Gちゃれの開催推移

年度	回数	開催日	開催場所	参加者数
2015年度	第1回	8月10日	千葉・イーグルレイク GC	6
	第2回	1月28日	埼玉・岡部チサン CC	6
2016年度	第3回	8月5日	東京・八王子 CC	25
	第4回	8月17日	東京・八王子 CC	21
	第5回	11月1日	東京・GMG 八王子 GC	5
	第6回	12月26日	兵庫・有馬 CC	16
	第7回	1月18日	東京・GMG 八王子 GC	18
	第8回	1月19日	東京・GMG 八王子 GC	15
	2017年度	第9回	5月28日	東京・GMG 八王子 GC
第10回		6月4日	東京・八王子 CC	7
第11回		7月27日	神奈川・川崎国際生田緑地 GC	41
第12回		7月28日	神奈川・川崎国際生田緑地 GC	60
第13回		8月3日	東京・八王子 CC	11
第14回		8月4日	兵庫・有馬 CC	7
第15回		8月4日	東京・八王子 CC	11
第16回		8月7日	東京・八王子 CC	32
第17回		8月8日	東京・八王子 CC	7
第18回		8月17日	東京・GMG 八王子 GC	8
第19回		8月21日	千葉・東我孫子 CC	2
第20回		8月23日	埼玉・高坂 CC	4
第21回		8月30日	熊本・くまもと中央 CC	2
第22回		9月7日	山梨・上野原 CC	3
第23回		9月9日	兵庫・有馬 CC	7
第24回		9月11日	兵庫・有馬 CC	7
第25回		9月12日	兵庫・有馬 CC	7
第26回		9月14日	埼玉・鴻巣 CC	23
第27回		9月15日	埼玉・鴻巣 CC	23
第28回		10月22日	東京・八王子 CC	9
第29回		11月19日	東京・八王子 CC	7
第30回		12月7日	神奈川・川崎国際生田緑地 GC	35
第31回		12月8日	神奈川・川崎国際生田緑地 GC	35
第32回		12月16日	兵庫・有馬 CC	28
第33回		12月25日	兵庫・有馬 CC	28
第34回		12月27日	兵庫・有馬 CC	28
第35回		12月27日	東京・八王子 CC	21
第36回		1月6日	東京・GMG 八王子 GC	4
第37回		1月17日	東京・GMG 八王子 GC	24
第38回		1月31日	東京・八王子 CC	9
第39回		2月23日	愛知・貞宝 CC	16

2015年からは、ゴルフ場業界の協力により、大学のゴルフ授業受講者が正課教育で学んだ知識や技術を、本物のゴルフコース（正課外）で発揮できる、ゴルフ場体験プログラムが開始されている。通常価格より格安で学生を受け入れるこのプログラムは「Gちゃれ」と呼ばれ、現在、全国の複数のゴルフ場で展開されている。

2017年度末までに39回のGちゃれが行われている（表1）。

2015年以降、627名がGちゃれを利用してゴルフコース（コースデビュー）体験をしている。2017年度末までに第40回までの開催が予定されており、2018年3月までの累積参加者学生数は700名程度になると見込まれている<sup>10)</sup>。

#### 4. 大学ゴルフ授業における様々なブリッジングと「八王子モデル」

このような「コースデビュープログラム」が頻繁に開催可能となり、多くの学生が参加可能となった要因は、正課内にとどまらず、学外（産業界）とのブリッジングが果たされたことにある。

2016年6月27日、全国の大学教養体育の連合体である、公益社団法人全国大学体育連合（大体連）と公益社団法人日本プロゴルフ協会（PGA）、そして、ゴルフの業界団体の連合体であるゴルフ市場活性化委員会（GMAC）は、鈴木大地スポーツ庁長官の立ち会いのもと、『大学のゴルフ授業充実に向けた産学連携協定』を締結するに至った（図1）。



図1 「大学のゴルフ授業」の充実を目指した産学連携調印式（馬場宏之氏、安西祐一郎氏、鈴木大地氏、倉本昌弘氏）

この連携協定により、ゴルフ場業界（日本ゴルフ場経営者協会）においては、正規の予約客がスタートした後の時間帯での、コース体験プログラム（Gちゃれ）の開催を受け入れた。コースによって多少の差があるが、昼食代等全て込で、学生の費用負担は1000円～2000円程度でGちゃれが開催されている。学生が実際に体験するのは4～6ホール程度であるが、初デビューの学生にとってはそれで充分の内容となっている。

従来、大学ゴルフ授業が学内にとどまらざるを得なかった最大の要因は「コスト」と「ゴルフマナー」であった。大学側の負担とせず、学生から実費を徴収するにしても、特に首都圏のゴルフ場における1ラウンドの費用は現在でも安いとは言えない。また、ゴルフは場内での振る舞いや服装、特にスロープレーに厳しいため、教育としてゴルフ場で授業を展開するには乗り越えなければならない高いハードルが幾つもあった。この連携により、ハードルを低く設定してもらうことが可能となり、授業とゴルフ場体験への接続・往還が可能となり、教育の質や学生が得るアウトカムも多様で、なおかつ深いものになっている（図2）。

例えば、参加学生のほぼ全員が「とても楽しかった」、「ゴルフにとっても興味を持つようになった」、「またゴルフ場でプレーしたい」、「今後もゴルフを続けたい」等、ポジティブな回答を残している。Gちゃれに参加した学生は、自ら参加を希望した者で強制的に参加させられた学生がいなかったことも影響しているが、全ての学生がポジティブな回答を記述している。これは、大学のグラウンドで学んだ知識や技術をゴルフ場で発揮できたことだけでなく、『他大学の学生や教員との交流』、『ゴルフ場や地域の人との交流』、『ゴルフ用品提供者など業界関係者との交流』なども影響していることが、事後アンケートから読み取れた。学生にとって、業界関係者との交流は、インターンシップ的な意味合いもあり、学生・業界関係者双方にとっても有

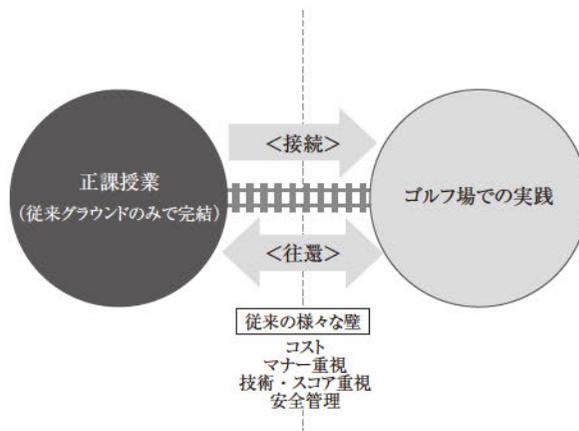


図2 「Gちゃれ」開始による大学ゴルフ授業の改善

意義な場となっている。このように、Gちゃれは、授業で得た知識やスキルを発揮・確認する場であることはもちろん、その他にも「産業」や「地域」、「他大学の学生」、「他大学の教員」など、様々なブリッジングを生んでいる<sup>11)</sup>。

これまでのGちゃれを開催することの多かったゴルフ場の多くは八王子市内に位置している。八王子市は日本有数の教育都市としても知られている。実際「大学コンソーシアム八王子」には25校が加盟し、11万人もの学生が学んでいるとされている<sup>12)</sup>。それに加え、八王子市内にはゴルフ場が4施設あり東京都内においてはゴルフ場が多い地域でもある。これまでのGちゃれでは、八王子市内の大学生や教員はもちろん、多摩地域の大学、東京23区内の都心の大学、山梨県の大学等から、Gちゃれに集っている（図3）。ここに、企業からのサポートや、地域のNPOなどからの支援の申し出があり、様々な連携・交流（ブリッジング）が生まれている（図4）。これらの現象は「八王子モデル」と称されている<sup>13)</sup>。

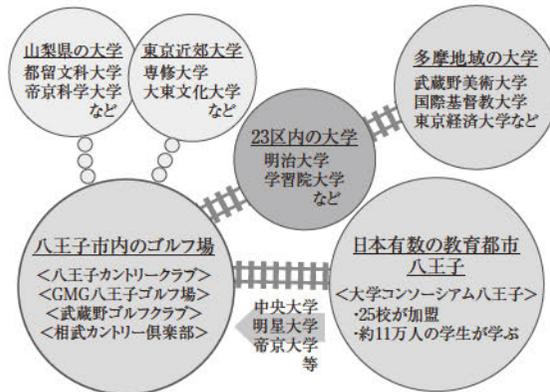


図3 「Gちゃれ八王子モデル」  
—ゴルフ場に様々な大学の学生・教員が集う事例—

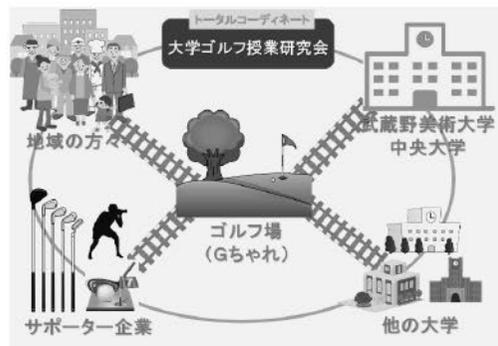


図4 「Gちゃれ八王子モデル」  
—Gちゃれを中心とした交流と連携の事例—

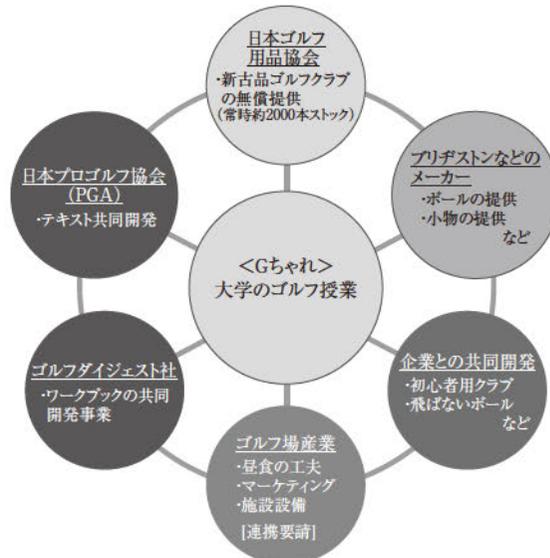


図5 Gちゃれを中心とした連携・支援の一例

ゴルフの用品業界（日本ゴルフ用品協会）においては，大学向けに教具（ゴルフクラブ）の無償提供が開始され，連携協定締結以降，約60大学に3000本を超える新品・新古品のゴルフクラブが寄贈されている。従来，ゴルフ授業を開講している大学では，ゴルフクラブは20年近く使用していることが多く，安全面でも問題が指摘されてきた<sup>14)</sup>。2016年以降，連携協定により高性能のゴルフクラブを授業で使用することができるようになった大学が激増している。また，各大学の学部・学科の特徴に応じて，産学連携が始まる事例（例えば，用具の開発・評価，書籍のデザイン等）も複数見られた<sup>15,16,17)</sup>（図5）。

このように，大学ゴルフ授業における正課外教育（Gちゃれ）を通じて様々なブリッジングが生まれている。ゴルフ授業をきっかけに構築された線をより太くし，開かれた大学を目指すためのブリッジングの展望として，①サポーター企業との連携（学生のインターンシップ，企業研究に関する情報共有，大学での教育・研究支援），②ゴルフ場産業との連携（地域ゴルフ教室の開催，体育授業の支援，大学教育・研究の支援），③地域との連携（運動・スポーツ教室，健康教室，健康指標・体力測定評価，大学の地域開放），④他大学・大学間の連携（合同練習会や合同授業，大学間交流，学生同士の交流，協同・共同・共働の活動）などが考えられる。特に④は「体育」科目ならではの連携ではないか（図6）。

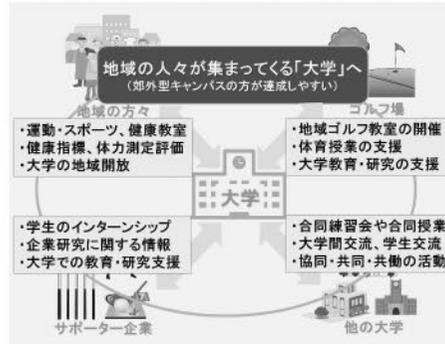


図6 ラーニング・ブリッジングを促進する環境形成の展望（大学と地域の交流促進）

## 5. ま と め

日本私立学校振興・共済事業団の調査によれば、全国の私立大学（581大学）のうち、2017年度に定員割れしている私立大学は39.4%であったことが報告されている<sup>18)</sup>。私立大学の定員割れは、既に数年前から問題視されており、2018年度から18歳人口の長い減少期に入ることから、大学関係者の間では「2018年問題」と言われている。2013年には110万人、2031年には100万人を割ると予想されている<sup>19)</sup>。

大学教養体育授業として「ゴルフ」は多数の大学で行われており、全国にゴルフ場が約2300カ所もある現状から、どの地域においても、大学が地域に出かけて行けば「八王子モデル」のような現象が起きうると思われる。実際、兵庫県の有馬カントリー倶楽部には、武庫川女子大、甲南大、追手門学院大など近隣の複数の大学がGちゃれに参加し、八王子と同じような現象が起きている<sup>20,21)</sup>。また、2018年2月には、愛知県の貞宝カントリークラブで初めてGちゃれが開催されるが、愛知学泉大、名古屋産業大、相山女学園大など、豊田市周辺の多くの大学が参加することになっている。このGちゃれ開催には、地元企業なども支援を表明しており、地域・産業・大学の交流が準備段階から活発になっている<sup>22)</sup>。

「大学ゴルフ授業」は、現状、産業や地域を結びつける副次的・波及的な力を持っている（図7）。しかしながら、学外での活動には制約やリスクが伴うこともあり、産業や地域が門戸を開いていても、学外での教育活動が叶わない状況が生じたり、それを懸念して一步を踏み出しにくい状況が生ずることも考えられる。例えば、森田ら<sup>23)</sup>は、大学体育授業を他領域の教員と連携する試みを報告しているが、本稿で報告したラーニング・ブリッジングを加速させるために

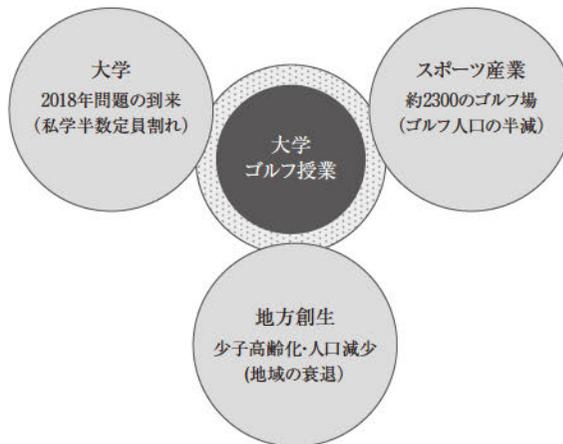


図7 大学ゴルフ授業の波及的・副次的効果の可能性

は、他分野の教員や大学当局の理解も不可欠であろう。

2018年度から移行が開始される文部科学省の新学習指導要領では、今回の改定により初めて「前文」が置かれた。その中に、「教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実施していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる」という一文が出てくる<sup>24)</sup>。このように、学校はさらに社会に開かれて行くことや、地域や企業との連携が求められ、大学のみならず、高等学校以下の学校期における教育実践にも、連携教育の検証の場が求められて行くと考えられる。

大学体育教育におけるステークホルダーを開拓し、ラーニング・ブリッジングが可能となる環境を整え、より良い教育とラーニング・アウトカムズを得るための、実証主義的研究事例はまだまだ少ない。今後、この類いの研究成果が増えて行けば、学生の更なる教育効果の向上はもちろん、地域活性化など波及的・副次的な効果をももたらす可能性があることが考えられる。

#### 参考文献・参考資料

- 1) 河合亨 (2014) 大学生の学習ダイナミクス—授業内外のラーニング・ブリッジング—, 東信堂。
- 2) 山田剛史 (2016) 他者との密接な関係性の中での最適な主体性の発揮が、学生の成長を促す, Kawajjuku Guideline 2016 (4-5) : 47-49.
- 3) Kuh, G.D. (2008) High-Impact Practices : What They Are, Who Has Access to Them, and Why

- The Matter. Washington DC: Association of American Colleges and Universities.
- 4) 北徹朗・森正明 (2017) 大学と地域・産業を繋ぐ正課外教育プログラムの実践—体育授業を中心とした試行—, 第23回大学教育研究フォーラム発表論文集: 242-243.
  - 5) 清水安夫 (2016) ラウンドテーブル4 大学体育の成果測定尺度の開発, 第4回大学体育研究フォーラム・プログラム・抄録, p.47.
  - 6) 文部科学省 (2009) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編.
  - 7) 北徹朗ら (2016) 大学ゴルフ授業における雨天時授業, 安全対策, ICT教材利用の実態調査, 大学体育107号: 106-112.
  - 8) 北徹朗・山本唯博 (2010) 大学ソフトボール授業に適した視聴覚教材に関する調査, 大学体育学第7号: 77-86.
  - 9) 北徹朗・山本唯博 (2013) ゴルフ授業における教場環境の違いが学習効果とゴルフ継続意欲に及ぼす影響—同一教員が担当した5大学における考察—, 大学体育学第10号: 61-70.
  - 10) 片山太郎 (2017) 年度末までに700人の参加視野, 大学生にゴルフ場体験の「Gちゃれ」急増, [https://www.gew.co.jp/movie/g\\_33688](https://www.gew.co.jp/movie/g_33688) (ゴルフ用品界ウェブ記事), (2018年1月4日確認).
  - 11) 北徹朗 (2018) 大学の教養体育授業 (ゴルフ) が大学・地域・産業を繋いだ事例—新学問領域「連携教育科学」の提案と地域活性化の可能性—, 地域活性研究 (地域活性学会オンラインジャーナル・査読無) (in press).
  - 12) 大学コンソーシアム八王子ウェブサイト, <http://gakuen-hachioji.jp/> (2018年1月4日確認).
  - 13) 巻頭特集「Gちゃれ」って何?産学協同の構造を探る, 月刊ゴルフ用品界 2016年12月号.
  - 14) 橋口剛夫 (2017) 「ゴルフの安全チェックリスト」の作成について, ゴルフ教育研究 Vol.3, No.1: 26-30.
  - 15) 赤坂厚 (2017) ゴルフを「おじさん」スポーツから変える発想, 東洋経済ONLINE, <http://toyokeizai.net/articles/-/189031> (2018年1月4日確認).
  - 16) 北徹朗 (2017) MUSA美×PUMA Golf キャディバッグデザインコンペ2017<表彰式>, 日本ゴルフジャーナリスト協会ウェブ記事, <https://jgja.jp/201710163785/> (2018年1月4日確認).
  - 17) T.Kita (2016) A Study on the Development of Golf Clubs for Beginners, World Scientific Congress of Golf VII Abstracts, p.16.
  - 18) 日本私立学校振興・共済事業団 (2017) 平成29 (2017) 年度 私立大学・短期大学等入学志願動向, p.2.
  - 19) 朝日新聞出版 AERA No.52, 2017年11月27日号, 大学再編 私立580大学のサバイバル能力: 11-29.
  - 20) 朝日新聞朝刊2016年12月27日 (兵庫三田面・23面), コースで学ぶゴルフの魅力 三田 女子大生らが体験授業.
  - 21) 朝日新聞朝刊2017年8月30日 (兵庫三田面・23面), 課外教育「Gちゃれ」広がる ゴルフ選択学生憧れのコースへ.
  - 22) 北徹朗 (2017) Gちゃれ「八王子モデル」—様々なブリッジングと地方創生の可能性—, 日本ゴルフジャーナリスト協会ウェブ記事, <https://jgja.jp/201711294158/> (2018年1月4日確認).
  - 23) 森田啓ら (2016) 学士課程教育における大学体育のその可能性と再定義, 体育学研究61: 217-227.
  - 24) 文部科学省 (2017) 新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/\\_icsFiles/afeldfile/2017/09/28/1396716\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afeldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf) (2018年1月8日確認).